

1950年代文庫ブームにおける岩波文庫と雑誌『文庫』

—その読者共同体の形成をめぐる—

The Reception of Iwanami-Bunko and “*Bunko*” Magazine in the 1950’s Pocket Sized Series Boom: On the Creation of a Community of Readers.

堀口 剛*

Tsuyoshi Horiguchi

1. はじめに

本論は、1950年代の岩波文庫における読者共同体の形成について論じる。具体的には、「岩波文庫の会」機関誌の雑誌『文庫』に寄せられた記事・投稿を対象とし、それを歴史社会的な文脈のなかに位置づけることによって検討を行っていく。

1950年代に入ると出版界において、文庫本の出版ブームが起こった。戦前から継続してきた文庫本のシリーズもまた、その文庫ブームのなかに巻き込まれていく。このなかに文庫本の先駆的な存在であり、かつ代表的なものとしてきた岩波文庫もあった。岩波書店は、文庫ブームのなかで「岩波文庫の会」を結成し、雑誌『文庫』を発行することによって、愛読者の組織化を進めていった。はたして、この当時に愛読者組織を作り出すことにどのような意味があったのだろうか。

近年行われた岩波文化の研究において、雑誌『文庫』はその資料的価値によって論文などで

記事が引用される一方で、その媒体自体に対しては関心が払われてこなかった。この時期の岩波書店をとりあげた佐藤卓己の『岩波書店百年史2』では、引用文献として『文庫』が用いられているものの、とくにその媒体自体については言及されていない（佐藤 2013）。戦中期の岩波文庫の受容について取り上げた堀口剛も引用文献として雑誌『文庫』を用いているが（堀口 2008）、堀口が論じたような岩波文庫の受容史について考えていくとき、戦後においてはまさに雑誌『文庫』という媒体に注目することが重要であろう。また、佐藤卓己による岩波の機関誌『図書』の研究においても、戦時下の岩波文庫の収集熱と「文庫単独の月報」創刊の希望があったことに触れたうえで、「こうした文庫ファンの望蜀は、戦後に月刊雑誌『文庫』（岩波文庫の会、一九五一年—六〇）として実現する」と触れられるのみである（佐藤 2015:100）。『図書』との関係について言えば、佐藤が述べるところ

* 東京大学大学院情報学環

キーワード：岩波文庫、『文庫』、1950年代、文庫ブーム。

の岩波文化の「広告媒体（メディア）」として、『文庫』と『図書』とは、両輪の関係にあったといえる。つまり、文庫ブームのさなかにあつて『文庫』を通じて、『図書』と同じように「自己言及を繰り返すことで岩波文化のブランド力は強度を増していった」（佐藤 2015：24）のである。

しかし、本稿の雑誌『文庫』という媒体の分析は、こうした点にとどまらず、ロジェ・シャルチエの「読者共同体」の議論へと接続しうる。シャルチエは作者によって書かれた「テキスト」、モノとしての「書物」、読者の「読書行為」という三極の関係から読書の実践＝プラチックについて論じている（Chartier 1992 = 1996）。こうした読書実践のなかで見出される集団の同一性が読者共同体である。本研究において問題となるのは、文庫ブーム下における、雑誌『文庫』を通じた岩波文庫の「読者共同体」の形成の戦術である。結論を先に示すならば、文庫ブー

2. 戦後における文庫本ブーム

さて、議論をはじめるとあたって、雑誌『文庫』が創刊される背景について述べておこう。ここでは、戦後における文庫本ブームについて確認を行っていく。

戦後、文庫の出版が再び活発になっていくのは、1947年からであった。この年に刊行をはじめたものとして、新潮文庫がある。新潮社から「文庫」という名で刊行された廉価版の叢書は、これが第四次（第一次が1914年、第二次が1928年、第三次が1933年にそれぞれ刊行されている）にあたる。第四次の新潮文庫は、そ

ム下においてテキストのレベルでは岩波文庫と他の文庫とは差異化を行うことは困難になっていた。しかし、雑誌『文庫』という媒体を通じて、岩波文庫という形態に対してステータスを付与すること、そして岩波文庫の読書経験を共有するということが、他の文庫でテキストを消費するのではない、固有の意味を生み出していた。そうしたなかに、雑誌『文庫』を通じた、1950年代の岩波文庫の読者共同体を認めることができるのである。

本論では、まず1950年代の文庫ブームについて概観する。つぎに、岩波書店が発行していた雑誌『文庫』へと照準をあて、その記事のメッセージおよび投稿された岩波文庫の読書経験について確認していく。そのうえで、あらためて文庫ブームとの関係性を捉えなおし、雑誌『文庫』を通じた当時の岩波文庫の読者共同体の形成について考察を行う。

れまでに出版されていた文庫のラインナップを引き継がずに絶版とし、全く新しい文庫として刊行をはじめている。また、このとき出版する書籍のジャンルを文芸に限定している。

さらには、角川文庫が1949年にB6版で刊行を開始し、1950年にはA6の文庫版へと形をあらためて再出発している。角川文庫はその当初、岩波文庫を先例とし、模倣していた⁽¹⁾。例えば、岩波文庫の「読書子に寄す」にならって、角川文庫の最終ページには「角川文庫発刊に際して」という宣言もつけられた。加えて、「読

書子に寄す」の草稿が三木清によって書かれたことをまねて、その草稿を山本健吉に依頼している⁽²⁾。結局のところ、角川書店の社長、角川源義自身の書いた文章が巻末におかれることになったが、こうしたエピソードも、岩波文庫を意識して発刊したことを意味している。料金体系も岩波文庫の星のかわりに、花一つを文庫の料金の単位に設定した。角川文庫は「新しき文庫の時代来る」という言葉をかかげ、前述した新潮文庫とともに、文庫本ブームの中心的な存在を担っていく。

こうしたなかで、1950年から1951年にかけて文庫の刊行ラッシュが訪れる⁽³⁾。文庫の数は最大で80種にも90種にも達したといわれ、ブームは1952年の年末まで続いていく。こうした空前のブームの原因を辿ると、当時の出版不況が影響している。鈴木(1970)によると1948年末に4600社もあった出版社は倒産が相次ぎ、1951年には1900社まで激減していた。こうした不況下の対策として登場したのが文庫

本の出版だったのである。この不況対策はあきらかに、かつての昭和恐慌の体験になっていた。昭和初期の不況においては、円本ブーム、文庫ブームが出版界に巻き起こった。その当時は再現するかのようになり、このときも全集本や文庫本が続々と出版されたのである。

こうした出版不況に加え、1951年の5月には用紙統制の全面解除が行われた。統制の解除は用紙供給の自由市場化を引き起こし、用紙の価格を大幅に引き上げたのである。岡野(1981)によれば、1951年1月に比べると、翌年の5月には紙価は10割も値上がりしていた。それにより、定価の2割を占めた書籍用紙が3割5分以上にはね上がり、書籍の価格もつり上がった。こうした書籍の値上がりもまた、文庫本のブームを後押しすることとなるのである。

以上のような文庫本のブームのさなか、岩波書店は岩波文庫の愛読者の組織化を進めていくこととなる。そこに登場したのが、雑誌『文庫』であった。

3. 雑誌『文庫』における岩波文庫に対するステータスの付与

雑誌『文庫』は、岩波文庫の愛読者組織「岩波文庫の会」の機関誌として1951年3月に発刊されている。当初は岩波茂雄の出身地であった長野県を対象に発行を行っていたが、6か月後の10月には全国にむけて出版がなされるようになる⁽⁴⁾。岩波書店の社史によると、「この雑誌は経済的な負担が多いため、一万人を限って会員を募集し、配布」したという(岩波書店1996)。「岩波文庫の会」の年会費は120円だったが、この雑誌『文庫』の製作費は1号あたり

およそ17円、その送料には8円かかっており、岩波書店側の負担も大きいものだった⁽⁵⁾。この雑誌は1960年の12月まで発行が続けられ終刊に至っている。

このように愛読者組織の機関誌として発行されていた雑誌『文庫』だが、第一の主眼に置かれているのは、文庫に収録された作家・作品の案内である。初期には岩波文庫の解題をそのまま掲載したものも散見されるが(宇野1951; 徳田1951)、ほとんどは岩波書店にゆかりのあ

る人物に依頼した書下ろしの文章で構成されている。掲載された内容は、作品紹介にとどまらず、翻訳や改訂作業に際してのこぼれ話、読書論、随筆、映画俳優について論じた記事などもあり、きわめて多岐にわたっている。

こうした雑誌『文庫』に掲載された記事のなかでまず注目したいのは、くりかえし岩波文庫の歴史的な経緯について言及がなされる点である。たとえば、その代表的なものに、長野県版の1号から連載され、全国版に移行した後にもあらためて掲載された「岩波文庫略史」が挙げられるだろう⁽⁶⁾。ここでは1927年の岩波文庫の発刊から戦後にかけてのさまざまなエピソードが紹介されている。岩波文庫のプロジェクトがいかなる経緯で誕生したのか、発刊後にどのような文庫が売れたのか、文庫収録に際しての作家とのやりとり、戦時中にどのような検閲があったのかといったことが記されている。

他にも岩波文庫25周年の際に掲載された「岩波文庫を語る」という記事がある。河野与一、東畑精一、宮澤俊義といった人物に加えて、岩波書店からは小林勇も参加して座談会が開かれており、岩波文庫の歴史や発刊当時のエピソードが語られている（河野・東畑・宮澤・小林1953）。そのほか、新村出による「文庫懐古談舊談」といった記事は、自身の読書経験をもとにして、「レクラム文庫」のこと、日本における明治・大正期の「袖珍文庫」、「少年必読・日本文庫」、「有朋堂文庫」といった文庫本の歴史のなかに、あらためて岩波文庫を位置づけようとしている（新村1951）。

ここから見えてくるのは、岩波文庫自身が進んできた経歴にくりかえし言及することで、

その理念を歴史的な背景に裏付けされたものとして構成していく過程である。

こうした態度は、海外の文庫シリーズとの比較といった観点にもみられる。そこで紹介されるのはスイス、ソビエト、イタリアといった海外での文庫出版である（野上1951；渡邊1952；井上1951）。こうした記事はもちろん、海外文庫の出版事情の紹介が第一である。しかし、文章のなかでは岩波文庫と比較するような言及も存在している。つまり、ここにおいて岩波文庫が海外の代表的な文庫出版に比することを示そうとしているのである。

この点がよりはっきりと明示されるのは、1959年1月号に掲載された「世界の文庫」である。記事のなかには、「創刊三十年余、その収録書目においても、世界屈指の大文庫である岩波文庫が、国際的にどのような水準にあるかを知るため、また私どもの編集の参考に資するため、以下のようなアンケートをもっとも代表的な叢書編集部に提出してみました」とある⁽⁷⁾。「世界屈指の大文庫」と自らを位置付けたうえで、海外の文庫との水準をはかろうとするのである。まさに岩波文庫が日本の文庫の代表だと主張し、世界の文庫に比するだけの地位にあると位置づけるのである。

このような海外の文庫出版との対比のなかでも、岩波文庫が模範としたレクラム文庫との対比はたびたびなされている。たとえば、長野県版の第1号の巻頭には、小泉信三による「岩波文庫とレクラム」という文章が掲載されている。ここで小泉はこれまでの岩波文庫の歩みを、「それは例えば、「エンサイクロペディア・ブリタニカ」がイギリスにとってそういはれて

も好いやうに、岩波文庫も、いまでは其自身の持つ日本の一国民的制度 (national institution) になったといへるであらう」と評価する。小泉は自身の読書経験において、「ただレクラム文庫に収められているというその一事に安心して、買って来て読むのが常であつた」。そして、「併し我が岩波文庫に対しても読書人の信用は稍、此域に近づきつつあると思ふ」と述べている (小泉 1951 : 3-4)。つまり、レクラム文庫に対する安心と同じように、岩波文庫に対する評価もまた、その文庫に収められているということが、ひとつのステータスとして評価できるというのである。

こうした記述は、佐藤通次による「文庫発刊の頃」でもみることができる。これは岩波文庫の発刊の時期に、佐藤が『思想』へ「レクラム文庫の沿革」という記事を寄稿したことを振り返ったものである。そこでは、以前の記事でレクラムが「世界文庫」と言えるほどに成長してきた沿革にふれたうえで、「岩波文庫にも数十年後の後にはかういう日の来らんことを心から祈って止まない」と書いたことを紹介している。そのうえで、次のような言葉で締めくくられている。

上のような結びの言葉を書いてから、既に二十五年の歳月が流れ、途中、戦争による多少の停滞はあっても、岩波文庫は着々と成長を遂げて、概数四千四百余星という巨大な文献の宝庫となった。本邦の文化に対する岩波文庫の貢献は、実質的にはおそらく幾つかの大学のそれにも匹敵するものであらうと思われる。(佐藤 1952 : 8)

ここでも先に引用した小泉信三の記事と同じように、岩波文庫をレクラムと比較し、そこに比するような貢献をするようになってきたことが述べてられている。

こうした言及はほかにも、小牧健夫の「文庫所感」、吹田順助の「岩波文庫とレクラム文庫」といった記事でなされている (吹田 1953 ; 小牧 1954)。さらには、1953年2月の雑誌『文庫』のあとがきでは、レクラムと対比して、次のように述べられている。

しかし、岩波文庫が昭和二年刊行されてより二十五年、満州事変、中日戦争、太平洋戦争と、怖るべき暴政の時代を過ぎていながら、それに便乗せず、屈せず、時局に迎合する出版をしなかったことを誇りと思っています。あの代表的古典的出版といわれているレクラムすら、ヒトラーの演説集を入れていたではありませんか。⁽⁸⁾

このように岩波文庫が「時局に迎合する出版をしなかった」ことを誇ってみせ、「レクラムすらヒトラーの演説集を入れていたこと」と比較するのである。

以上のような記述から見えてくるのは、岩波文庫というシリーズをめぐって、その理念や出版活動について、歴史的な観点から、そして海外の文庫シリーズとの比較のなかで、そのステータスを確認しようとするメッセージである。それはつまり、岩波文庫の愛読者たちに対して、小泉信三の言葉をかりれば、「信用」を訴えかけようとするものだといえる。

こうした側面とは別に岩波文庫へのステータ

スの付与を行っているものとして挙げられるのは、さまざまな執筆者による岩波文庫の読書体験記が掲載されている点である。このことは、著名な人物もまた文庫の愛読者だということで、岩波文庫の位置を高めようとするメッセージだといえる。

ここでいくつかの例を挙げてみよう。たとえば、塩田庄兵衛による岩波文庫の読書経験の回想では冒頭に次のように書かれている。

「文庫の会員用」につくられた「岩波文庫解説目録」をもらって眺めていると、思いもよらなかったほどいろいろなことを、あとからあとあら思い出して感興が付きない。それは、これまで私が読者として岩波文庫と深い関係を持ち、強い影響を受け続けてきたことに、いまさらながら気づかせられたからである。(塩田 1955: 15)

この文章で塩田は自身の読書経験を振り返り、高校時代にいちばん岩波文庫に「御厄介」になったといい、マルクス主義関係の文献や『ジャン・クリストフ』などを読んだ経験などを紹介している。そして、こうした岩波文庫の読書遍歴を振り返って、「今日の私の形成に、岩波文庫が少なからぬ関係を持っていることははっきりいえる」とあらためて宣言している(塩田 1955: 17)。

そのほかにも、杉浦明平による戦時中の文庫熱の高まりと自身の読書経験について語ったものがある。杉浦は戦時中に文庫の蒐集が流行したことを指摘し、自身もまた蒐集していたことを回想する。戦時下の最後に出た文庫までで「わ

たしの持っていないのは四五冊だけ」であり、購入した岩波文庫はすべて読んだという。さらに、このように読書に費やすことによって自分の青春が過ぎてしまったと振り返り、「わたしは岩波文庫に感謝するとともに、この千何百冊かの中にわたしのいちばん大切な時が埋もれてしまっているように悲しみも感じるのである」と、締めくくっている(杉浦 1952: 13)。

こうした例だけでなく、村川堅太郎は「ひと昔前のこと」として、自身の経験を語っており、トルストイの『戦争と平和』を購入したときのこと、戦時下において、「洋書の入手は全くなかった頃私は鶴沼で農耕のかたわら岩波文庫の文学ものに読みふけた」読書経験を振り返っている(村川 1954: 16)。また、三輪福松も、文庫熱が戦時中に高まっていたことを指摘し、自身も岩波文庫を買いあさったことを回想する記事を寄稿している(三輪 1951)。さらには、戦時下に治安維持法で拘留された山邊健太郎は、監獄の検閲をクリアしながら岩波文庫を読んだ体験を語っている(山邊 1955)。

これらの記述に一貫しているのは、寄稿者たちも岩波文庫の愛読者であり、文庫から多くの影響を受けてきたと告白する点である。岩波文庫というシリーズを蒐集し、読むということを通じて、これらの寄稿者もまた知識を身につけてきたというメッセージが読み取れる。ここにおいても、岩波文庫という形態のもつステータスについて強調しようとしていることがわかる。岩波文庫の愛読者たちは、雑誌『文庫』によせられた読書体験記を読むことで、文庫の読書を通じて知識を得られることに対して信頼を寄せることが可能となるのである。

以上のように、ここまでの記述のなかでは、雑誌『文庫』の記事から読みとることのできるメッセージについて記述してきた。雑誌『文庫』によって発せられたメッセージとは、単に岩波

文庫に収録された作家・作品の紹介といったものだけでなく、岩波文庫という形態に対するステータスを読者たちに訴えるものだったといえる。

4. 『文庫』読者のふるまい——投書欄の分析から

前節では、雑誌『文庫』の記事から読みとれるメッセージについて述べてきたが、つづいて、この雑誌の投稿欄を見ていくことで、雑誌『文庫』において読者たちがいかなるふるまいを見せていたのかについて論じていきたい。

まず、確認しておきたいのは、こうした雑誌『文庫』への投書が、岩波文庫の編集者側とのコミュニケーションツールとして機能していたということである。たとえば、1951年11月号に寄せられた投書によると、投稿者は手元にある400冊の文庫の入る書棚を作ろうとしたものの、うまくいかず途中で投げだすことになったという。そこで文庫のための書棚を作成してほしいとの要望を寄せたのだとある。翌年の1952年2月号には、書棚の作成を希望した投稿者に対する賛成意見が掲載されている。これらの希望に対し編集側も「本箱、製本、カバーについてのご希望、研究致したい」と約束し、「いざれにしても文庫を愛してくださる方々の御希望に何とか応じたいと思っております」と答えている⁽⁹⁾。実際、こうした要望がかなりの量寄せられていたようで、その数か月後には本箱の製作の仕方が紹介されている⁽¹⁰⁾。さらには、文庫本をあらためて製本し直したり、合本したりする方法についても、記事を2回にわけて掲載している（牧恒夫 1952a；1952b）。また、再

版されない文庫の収録作品があることへの不満の投書が多く寄せられたようで、翻訳権の問題や著作権の問題といった点で困難があることを説明する記事なども掲載されている⁽¹¹⁾。そのほかにも、短期間ではあるが、読者が岩波文庫の収録作品を読んで感じた疑問に対して、学者が解説を行うといったコーナーが設けられたりもしている。

こうしたやりとりをみると、読者たちは自身の希望を編集側に伝えるために、雑誌『文庫』を利用していたことが確認できる。編集側にとっても、読者側の要望を聞き、それに答えていく場所として利用していたことがわかる。

そのうえで興味深いのは、読者たちが岩波文庫の読書経験の共有を望む投書を寄せている点である。以下で、その事例について取り上げて論じていく。

たとえば、北海道の宗谷に住む読者は「日本の一番北の村」に住む会員と自称したうえで、自身の読書体験を語っている。この読者は、第二次世界大戦のときの空襲で家を焼かれ、6000冊もの蔵書が焼失してしまったことを悔やんでいる。そのなかには、岩波文庫も500冊ほどあったという。貧しい生活のなかで再び蔵書を集め始めている彼は、「この村だけの、文庫の会でも作りたのが念願」だと述べている。また、

自身が「一番北」に住んでいることから、「一番南」の読者が誰なのか知りたいとも書いている⁽¹²⁾。この投稿からは次の2点を確認できるだろう。第一に「この村だけの、文庫の会でも作りたいのが念願」と述べるところでは、自身が所属する地域やコミュニティにおいて、岩波文庫を共有するような仲間同士のつながりを求めていることがわかる。さらに第二として、自身を「一番北」と位置付け、「一番南」の読者を知りたいと述べることで、日本全国に岩波文庫の読書経験を共有する人々がいることを確認しようとする態度も読みとることができる。

ここで引用した投書については、似たような経験を語っている例は多い。たとえば、「一番北」の読者が望んでいたような、地域やコミュニティで岩波文庫を読むことを共有していくような経験の例を見てみよう。ある女性の読者からの投書では「私たちの読書会」という題で、学校時代の友人や近所の夫人をあつめて読書会を開催しており、解説目録を参照としながら岩波文庫を読み進めているという報告がされている⁽¹³⁾。また、職場の寮で文芸サークルが生まれ、そのなかで若い世代の人々に岩波文庫をすすめているといった事例を紹介する投稿もある⁽¹⁴⁾。

また、空間的な広がりにもかかわらず、岩波文庫の読書経験の共通性について語られている投書もみることができる。たとえば、「岩波文庫に生きる」と題された投書では、百数十冊そろえていた岩波文庫を震災ですべて失ってしまった読者が、貧しい生活の中であらためて岩波文庫を購入し直して、読書していることが述べられている⁽¹⁵⁾。加えて、京都に住む読者からは、「この「読者のページ」では戦火のために書籍を失っ

た人の話を幾つか読んだが」と前置きしたうえで、幸いにも自分はそうした体験をせずにすんだものの、戦後に失業した結果として、やむをえず愛蔵していた文庫を手放さざるを得なかったことが述べられたりもしている⁽¹⁶⁾。これまでとは理由は異なるものの、自身の蔵書にあった岩波文庫を手放さなくてはならなかったという経験を共有している。このように、自身の経験と似た事例を述べあうことで、それぞれの個別的な読書経験としてではなく、その経験を共有をしようとするのである。

こうした読書経験の共有といった点については、単に読者同士の経験の共有といった点に留まらない可能性を秘めている。というのは、前節で述べたように、雑誌『文庫』に寄稿していた執筆者もまた、自身の読書経験を語っているためである。読者たちは、こうした執筆者たちも岩波文庫の読者の一人であり、自身もまた同様に岩波文庫を読む一読者であるという点において、共通性を抱いていたのではないだろうか。

大阪に住む読者は「僕と岩波文庫」というタイトルで自分の読書遍歴を次のような書き出しから始めている。

僕が中学生の頃、一番最初買った岩波文庫は「科学の学校」(上巻)と「銀の匙」であったように思う。——先日送ってもらった文庫の会員用の岩波文庫解説目録で僕の持っている文庫をチェックし乍ら《僕と岩波文庫》の関係を考えて見た。⁽¹⁷⁾

彼によれば、終戦直後、古本屋に並ぶ岩波文

庫は「垂涎の的」であったという。さらに、彼は終戦直後知人が蔵書を処分することになった際、多くの岩波文庫を手に入れることができたため、有意義な時間をすごすことができたと述べる。

これを前節で取り上げた塩田の読書体験記と比較してみよう。ここにかなりの相似が見て取れる。冒頭の部分において、岩波文庫の解説目録をながめつつ、自身と岩波文庫の関係を振り返りはじめる点などは、両者に共通している。この投稿者が雑誌『文庫』に投書したのは、塩田の文章が書かれる以前であり、塩田のテキストを真似たわけではない。つまり、岩波文庫という媒体をめぐって、まさに雑誌『文庫』に寄稿した著者と同じ行為を、一読者もまた行っていたわけである。

5. 考察

さて、ここまで雑誌『文庫』におけるメッセージと、その読者のふるまいについて取り上げてきた。では、こうした岩波文庫を読むことを通じた共同性の希求は、いかなる背景のもとで生じていたのだろうか。ここであらためて、冒頭で述べた1950年代の文庫ブームへと戻り、そのなかでの岩波文庫の位置について考察を行っていく。

1951年の文庫本ブームが巻き起こっているさなか、1951年11月の日本読書新聞に「文庫本氾濫」「はやくも飽和状態」といった見出しの記事が掲載されている。そこでは次のように述べられている。

こうした点については、文庫の蒐集といった点についても同様である。前節において岩波文庫の蒐集が流行し、自身もまた岩波文庫を集めていたという経験を杉浦明平、三輪福松といった人物が語っていることについて触れた。これについて、「蒐集趣味としての岩波文庫」という投稿では、戦時下において蒐集趣味として岩波文庫を買い集めた回想がなされている⁽¹⁸⁾。このように岩波文庫の読書経験において、雑誌『文庫』に寄稿した人物と読者との距離は限りなく近づいていたといえる。

以上のように、雑誌『文庫』内において、読者たちは積極的に編集側に自身の要望を伝えるとともに、読者同士や、ときには寄稿者とも同一化を図りながら、岩波文庫の読書経験を共有しようとしていたのである。

文庫本がかくもハンランし出したのは、読者のフトコロ具合を慮ってというのがまず第一の理由だが、もう一つ見逃せないのは、あちこちの出版社で文庫を出してから、売れ行きの良い単行本がねらわれる傾向が強くなり、自分のところの本を他の文庫に取られてしまうのを黙ってみているテはないと文庫出版に乗り出す出版社も出てきたことで、創元、三笠などの場合はそれが大きな理由になっているようだ。かくて文庫も“古今東西にわたる万人必読の真に古典的価値のある書”とはっきりうたうごとき概念が崩れたと慨嘆する向きもあり、主義・主張に沿った企画などはともかく、“文庫”

とは縮刷・廉価版ということだけが看板になってしまった観がある。⁽¹⁹⁾

記事にある「古今東西にわたる万人必読の真に古典的価値のある書」とは、まさに岩波文庫の発刊の辞にある言葉である。しかし、こうした概念が崩れ「縮刷・廉価版ということだけが看板」に文庫本の位置づけが変化しているという。さらに翌年の1952年2月の朝日新聞には、「行詰った文庫本」という記事が掲載されている。ここでは前年に起こった文庫ブームがはやくも行き詰ったと述べられ、そのなかで起こった業界内の弊害について、次のように述べられている。

読者にとって安く本が買えるのは、たしかに有難い“流行”であったろう。(中略)しかし弊害はむしろ業界内に醸された。企画の奪い合いを称して“ハゲタカのように”と編集者達は自らをあざけた。永井荷風の「墨東綺譚」が四社の文庫で出るし、十年このかた少年読物として衰えない下村湖人の「次郎物語」は、小山書店版をはじめ四種の単行本を経て角川文庫に入った。⁽²⁰⁾

加えて、こうした帰結として、『図書新聞』1954年9月には「だぶる文庫本」という記事が掲載されている⁽²¹⁾。この記事の中では、同じ作品が4つ以上の文庫で重複しているものリストアップをおこなっており、日本文学作品は24作、海外文学は17作にものぼっている。なかでも夏目漱石の『三四郎』などは、8社にもおよぶ文庫がこの作品を収録している。この

ように「売れる」作品が次々と文庫化された結果として、一社がその作品を独占することはできず、各社の文庫に読者たちは分散することになった。

こうした状況にあって、岩波文庫も無関係ではありえなかった。岩波文庫に収録されていた作品が、他の文庫で重複して収録されるようになったのである。前述した記事でもふれたが、夏目漱石の作品はこうした傾向が顕著である。ここで1953年の4月13日付の『読書新聞』に発表された、創刊以来25年間を通じての岩波文庫の日本文学作品のベストセラーを見てみよう⁽²²⁾。そのなかでベスト3までを漱石の作品が占めており、1位が『坊っちゃん』(42万8千部)で、2位が『草枕』(39万4千部)、3位が『こころ』(35万3千部)となっている。そして、これらの作品を上記で示した各文庫に重複して収録されている作品のリストと照らし合わせてみると、『坊っちゃん』、『草枕』、『こころ』のそれぞれが6つの文庫に収録されており、それ以外の漱石の代表作もまた、他の文庫に収録されていた。言うまでもなく、岩波書店と夏目漱石との関係は、最初期の『こころ』の出版、そして漱石全集の出版といったかたちで強い結びつきを見せており、岩波にとって主力の商品であった。しかし、そうした地位は、こうした文庫本の重複のなかで急速に相対化されていくのである。加えて、外国文学の領域においても、売り上げのベスト10に入っている、モーパッサン『女の一生』、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』、シュトルム『みずうみ』、メリメ『カルメン』、ジッド『田園交響曲』といった作品が、こうした競争のなかで、複数の文庫で翻訳さ

れ、収録されるようになっていた。つまり、これらのテキストを読もうとしたときに、必ずしも岩波文庫で読む必要がなくなっていたのである。

こうした状況ゆえに、第3節で述べてきたような岩波文庫という形態に対して付与されたステータスの強調を通じて、他の文庫との差異化をはかろうとしたのだといえる。雑誌『文庫』でも、文庫ブームに対し批判がなされている。その主張が表れているのは1951年12月の『文庫』のあとがきに記された以下の文章である。

新しい文庫が次から次へと発刊され、今日すでに二十数種を数えるという。昨日の××賞が今日の××文庫に入り、大版で売れないものが装を新たにしてお文庫版となり、昨日のベストセラーズ、又今日の文庫となる。こうした状況をみれば、一般の読書子が文庫即廉価本と云う概念を持つことは当然のことといわなければならぬ。しかしながら、その中であって岩波文庫のみは古典ということのみを第一眼目としている唯一の文庫といい得るであろう。岩波文庫のどの一冊も古典中の古典であるしどの一冊も五十年否百年もの生命をもつものである。古典とは生命を失い干からびたものではなく、永遠の青春性をもつものである。吾々は「古典に親しむ」ことによるのみ、現代の混乱の世代に、ゆるぎない確信をもつことができるだろう。吾々が岩波文庫を自信をもって薦める所以のものも又ここにある。⁽²³⁾

この文章を見ると、岩波文庫とその他の文庫とを差異化しようとする意図がみえる。他の文庫はベストセラー化・廉価版化といった側面では文庫を捉えていないと批判する。一方で、岩波文庫は「古典」を第一的な眼目とした唯一の文庫であることが打ち出されている。そして、それを補強するものとして呼び起こされるのが、これまでの歴史的経緯や他の文庫に比するような岩波文庫という形態に付与されたステータスだったのである。

では、岩波文庫の読書経験を語り合うことによって、読者同士や『文庫』寄稿者と同一化を図り、それを共有しようとしていた人々はどのように位置づけられるだろうか。前述したとおり、有名な作品は文庫ブームのなかで複数の文庫に収録がなされ、テキストのレベルの特権性は急速に相対化されていた。単にテキストを消費するのであれば、どの文庫であっても構わないはずである。しかしながら、こうした雑誌『文庫』の読者たちは、岩波文庫という形態のレベルに傾倒し、他でもない岩波文庫こそが自身の読書実践にとって意味あるものとして位置づけていくのである。こうしたテキストのレベルでの差異化が困難な状況において、岩波文庫という形態に付与されたステータスを受け入れ、その読書経験を共有しようとする態度のなかに、1950年代における岩波文庫の読者共同体が立ちあわられてくるのである。そして、こうした読者共同体の結節点として、雑誌『文庫』という場が機能していたのである。

5. おわりに

議論を終えるにあたって、冒頭で取り上げたシャルチエの次のような言及をとりあげたい。シャルチエは自身の文化史の方法を提示するなかで、次のような指摘を行っている。

すなわち、形態が意味を生むということ、そして文字の上では安定しているかに見えるテキストも、読まれるためにそのテキストを提供している印刷物の仕掛けが変わるとき、思いがけない意味作用やステータスを身におびてくる、ということである。(シャルチエ 1992 : 3)

文庫ブームのなかで、各社の文庫に重複して収録された作品は「テキスト」のレベルではまったく同じものである。しかしながら、岩波文庫という「形態＝印刷物の仕掛け」のレベルが変化することで、そこに意味作用やステータスを

帯びることになる。つまり、岩波文庫という「形態」のレベルが、読書実践のあり方に作用するのである。文庫ブーム下にあって雑誌『文庫』という媒体が担っていたのは、他にもない岩波文庫という「形態」に対するステータスを生み出そうとする場であるとともに、読者たちがそうした「読書行為」というレベルを共有しようとする場でもあった。こうしたなかから、この時期の岩波文庫の読者共同体は形成されていたのである。

岩波文庫という「形態」を通じた意味作用やステータスの付与と、それを担保とした読者たちの共同性の形成について記述することは、単に文庫本の出版史という観点に留まらないだろう。書物の形態に付与される意味や価値が、当時の歴史・社会的な背景とどのよう重なり合っていたのかという点から出版文化を考えるためにも重要な事例だといえる。

註

- (1) 角川文庫発刊の経緯については、鎗田（1995）の角川源義に関する著作が詳しい。
- (2) このとき、山本健吉は角川書店に編集部長として勤務していた（鎗田 1995）。
- (3) この文庫ブームについては矢口（1979）、鈴木（1970）、岡野（1981）の記述を参考にしている。
- (4) 発行が全国化されたとき、あらためて『文庫』の巻号は1号からのカウントしなおされている。本論文では巻号の混乱をさけるため、すべての記事の出典を発行年と月で統一している。
- (5) 『文庫』1954年3月号19頁
- (6) 『文庫』1951年3-7月号・9月号、および『文庫』1951年11-12月号・1952年2-4月号
- (7) 『文庫』1959年1月号20頁
- (8) 『文庫』1953年2月号24頁
- (9) 『文庫』1952年2月号19頁
- (10) 『文庫』1952年7月号19-20頁
- (11) 『文庫』1952年1月号16-18頁
- (12) 『文庫』1952年3月号16-17頁
- (13) 『文庫』1955年6月号18頁

- (14) 『文庫』1959年12月号22-23頁
 (15) 『文庫』1958年5月号24頁
 (16) 『文庫』1957年12月号28頁
 (17) 『文庫』1953年1月号10頁
 (18) 『文庫』1953年6月号19頁
 (19) 『日本読書新聞』1951年11月21日
 (20) 『朝日新聞』1952年2月16日
 (21) 『図書新聞』1954年9月25日
 (22) 『日本読書新聞』1953年4月13日
 (23) 『文庫』1951年12月号24頁

参考文献

- Chartier, Roger, 1992, *L'Ordre des Livres: Lecteurs, Auteurs, Bibliothèques en Europe entre XIV et XVIII Siècle*, Aix-en-Provence, Alinea. (= 1996, 長谷川輝夫訳『書物の秩序』ちくま学芸文庫)
- 堀口剛(2008)「戦時期における岩波文庫の受容——古典と教養の接合をめぐる」『マス・コミュニケーション研究』第72号40-57頁
- 井上満(1951)「ソヴェートの文庫本」『文庫』6月号14-16頁
- 小泉信三(1951)「岩波文庫とレクラム」『文庫』3月号2-5頁
- 小牧健夫(1954)「文庫所感」『文庫』9月号13-14頁
- 河野与一・東畑精一・宮澤俊義・小林勇(1953)「岩波文庫を語る」『文庫』4月号6-13頁
- 牧恒夫(1952a)「趣味の文庫製本」『文庫』5月号14-19頁
- 牧恒夫(1952b)「続趣味の文庫製本」『文庫』9月号16-18頁
- 三輪福松(1951)「文庫蒐集の思い出」『文庫』12月号12-15頁
- 村川堅太郎(1954)「ひと昔前のこと」『文庫』7月号15-17頁
- 新村出(1951)「文庫懐古談舊談」『文庫』8月号2-6頁
- 野上素一(1951)「イタリアの文庫本」『文庫』10月号10-15頁
- 岡野他家夫(1981)『日本出版文化史』原書房
- R. シャルチエ・福井憲彦訳(1992)『読書の文化史——テキスト・書物・読解』新曜社
- 佐藤卓己(2013)『物語 岩波書店百年史2』岩波書店
- 佐藤卓己(2015)『『図書』のメディア史』岩波書店
- 佐藤通次(1952)「文庫発刊の頃」『文庫』3月号6-9頁
- 塩田庄兵衛(1955)「岩波文庫と私」『文庫』10月号15-18頁
- 杉浦明平(1952)「私の青春」『文庫』5月号10-14頁
- 吹田順助(1953)「岩波文庫とレクラム文庫」『文庫』3月号5-7頁
- 鈴木敏夫(1970)『出版 好不況下 興亡の一世紀』
- 徳田一穂(1951)「縮図について」『文庫』7月号10-13頁
- 宇野浩二(1951)「『蔵の中』の思ひ出」『文庫』5月号6-9頁
- 渡邊護(1952)「マネッス文庫について」『文庫』12月号12-13頁
- 矢口進也(1979)『文庫そのすべて』図書新聞
- 山邊健太郎(1955)「獄中の読書」『文庫』12月号14-16頁
- 鎗田清太郎(1995)『角川源義の時代—角川書店をいかにして興したか』角川書店



堀口 剛 (ほりぐち・つよし)

[生年月] 1981年7月27日

[出身大学または最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府博士課程満期退学

[専攻領域] メディア論・メディア史

[主たる著書・論文]

「ニュースが伝える失言、ニュースが組み立てる失言——鉢呂経産大臣の「死のまち」発言をめぐって」(伊藤守・岡井崇之編『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』、2015年、世界思想社)

「『街の声』のメディア史——ラジオ『街頭録音』と『街頭の世論』をめぐって」(『マス・コミュニケーション研究』第80号、2012年)

「戦時における岩波文庫の受容——古典と教養の接合をめぐって」(『マス・コミュニケーション研究』第72号、2008年)

[所属] 東京大学大学院情報学環客員研究員

大妻女子大学・成蹊大学・武蔵野大学非常勤講師

[所属学会] 日本社会学会 日本マス・コミュニケーション学会 社会情報学会、メディア史研究会

The Reception of Iwanami-Bunko and “*Bunko*” Magazine in the 1950’s Pocket Sized Series Boom: On the Creation of a Community of Readers.

Tsuyoshi Horiguchi*

The purpose of this paper is to understand the reception of Iwanami-Bunko and “*Bunko*” magazine in the 1950’s pocket-sized series boom. More particularly, I focus on the “*Bunko*” magazine’s articles and reader’s contributions and explore the tactics that Iwanami-Bunko and its readers create distinction among other pocket-sized series. This analysis utilizes Chartier’s approach to a community of readers.

Until now the “*Bunko*” magazine has been considered a material to understand “Iwanami Culture”. But by focusing on an aspect of medium, this research reveals that the “*Bunko*” magazine creates a community of readers of the Iwanami-Bunko in 1950s. The Iwanami-Bunko’s form as a pocket-sized series has a particular meaning for its readers.